

1 県外研修報告 ※本校本事業の国語の担当者である森本先生の県外研修の報告です。

平成29年10月28日(土)に岡山大学で開催された日本協同教育学会第14回大会に参加しました。

内容は、自由研究発表につづき、京都大学大学院教授の西岡加名恵先生が記念講演(演題:「主体的・対話的で深い学び」の実現とパフォーマンス評価)をされ、最後にワークショップ・ラウンドテーブルという形式の協議がありました。

自由研究発表では、第5分科会(高校・予備校における協同学習)に参加し、なかでも予備校における協同的な学びを促す授業実践というテーマで発表された竹内利光(河合塾)先生の方法が印象に残りました。

予備校における医学部志望生徒の英語での授業実践で、その内容は次のようなものでした。

隣にノートを回し他者の意見を読んでコメントをつける→討議→代表者が答えを板書→教師の訂正・コメント

ラウンドテーブルでは、「学習指導研究室を中心とした授業改善の取組」というテーマで、岡山県立倉敷清陵高等学校の先生方が発表されましたが、その内容は次のようなものでした。

▶本校は平成25年度から協同学習を実践する動きができた。その前年には教科主任を集めた「学習指導研究係会」が組織され、グローバルスタンダード学力としての自律性・主体性・課題解決能力を育成する授業研究が始まった。平成26年からは、指導教諭と教科指導に長けたミドルリーダーを室員にした「学習指導研究室」が一つの校務分掌となり、校内研修を牽引する役割を担っている。岡山大学の高旗先生、中京大学の杉江修治先生に指導を仰ぎ、講演や授業改善の校内研修を行っている。

国語科の三村先生は、単元の最後に討議の時間を設定し、生徒が自身の在り方や生き方について考え、級友との価値観の違いに気づいたり、読解の深まりや自身の変容を自覚したりできる工夫をしている。

英語科の中野先生は、授業における「聞く・話す・読む・書く」4技能の統合を目指し、「コミュニケーション英語Ⅲ」での読解活動を、話す・書くといった活動につなげるために、要約を組み込んでいる。要約の過程で、生徒には思考・判断・表現の力が問われる。要約した内容について話す・書く活動は、個人→ペア→グループ→クラス全体と段階的に行っている。

理科(物理)の村山先生は、授業の目標を第一に考えて指導計画を立て、当該の授業で生徒に身につけてほしい力は何かを考え、そのために最適な教材の準備と授業転換を心がけている。授業の見通しを持たせるための学び時計の明示、教師の説明時間の短縮をし、生徒の活動時間の確保につなげている。

数学科の岡本先生は、グループで互いの答えを議論させ、その後全員の前で1グループの答えをICT機器で投影し、発表・討論をさせる授業を実践している。教師はあくまでも授業の流れをコントロールするだけで生徒が自由に発言できる環境づくりに努めている。◀

森本先生はこの学会への参加を通じて、次のような感想を持たれました。

「他県の異なる校種・予備校における実践の報告から自分の実践の参考になるものも多くあったが、特に、倉敷清陵高校での授業改善の取り組みや課題を聞いて、本校の抱えている課題と同様であり実践者の悩みも大変共感できるものであると思った。困難や課題を抱えつつも日々試行錯誤しながら授業改善をする先生方の存在に励まされた。」

2 学ぶということ

12月16日(土)、くにびきメッセで第5回山陰地区SSH成果共有会が開催されました。

午後には「偉大な先人に学びつつ、自らを高めよう」という演題で、東京理科大学学長の藤嶋昭先生が講演されました。その中で、「火をおこすには火打ち石が二つ必要だ。」という言葉を紹介されました。つまり、何事も自分一人ではやるには限界がある、仲間との信頼関係を大切にすることでしょうか。この言葉で思い出したのが、11月19日(日)出雲高校で「社会性を育てる関わり方 ～ソーシャルスキルトレーニングの考え方を援用して～」というテーマでウィッシュの研修講師をされた、明星大学の小貫悟教授の言葉でした。「遊ぶは、相手がいるから楽しい。学ぶも同じ。相手がいると楽しい。」

このことは、本校運営指導委員である岡山大学教師教育開発センターの高旗浩志先生にご教示いただいた「支持的風土」という考えにつながるところがあります。「支持的風土」、つまり失敗や間違いが気持ちよく受け入れられる環境。どの子どもにとっても居心地がよい環境。学び合いのある環境。集団で学ぶことの意義とそれを可能にする教育環境の醸成が大切だと改めて考える良い機会になりました。

3 新テスト

11月13日(月)～24日(金)の日程で、大学入学共通テストの導入に向けた試行調査(プレテスト)が全国約1,900校の高等学校等で実施されました。

本年度の本校の重点課題の一つに、「生徒の主体的な学びの育成」があり、その実現のための授業改善に向けて、本校教員が常に意識していることが、2つの問い・・・「発問」と「作問」です。

特に「作問」を意識するために本校では定期試験に新テストを意識した問題を必ず一問入れるようにしています。また、評価改善のために、問題は教務部を通じて管理職に提出することになっています。

次の問題は、11月23日（木）「アクティブ・ラーニングの視点による授業改善」というテーマで開催された島根の教育を愛する会で、本校校長が提案発表した時に紹介した問題の一部です。

- (1) 銅像の真正面に立ち、銅像の真下から12m離れた位置から、高さ1.5mの台座に乗せた高さ4mの銅像を見る。このとき、目の高さが1.5mの花子さんの銅像を見込む角として最も近いものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。 ア

- ① 4° ④ 12°
② 8° ⑤ 14°
③ 10° ⑥ 16°
⑦ 18° ⑧ 20°
⑨ 22°

- (2) 銅像に近づいたり離れたりとすると、見込む角の大きさは変化する。見込む角が最大になるときの、見る人の足元の位置を「ベストスポット」とよぶこととする。この「ベストスポット」について、太郎さんは次のように考えた。

【太郎さんの考え】

3点A, B, Pを通る円の半径を R とすると、ABの長さは常に一定であることから、 $\angle APB$ が鋭角ならば、 $\angle APB$ が最大となるのは、 R が最小のときである。

- (i) $\angle APB$ が鋭角であることを確かめる方法を、 $\triangle APB$ の3辺の長さAB, AP, BPについての式を用いて説明せよ。解答は、解答欄 (あ) に記述せよ。

- (ii) 【太郎さんの考え】が正しいことは、 $\sin \angle APB$, AB, R を用いたある関係式と、「 $\angle APB$ が鋭角のとき、 $\angle APB$ が大きくなるほど $\sin \angle APB$ の値は大きくなる」ことからわかる。その関係式を答えよ。解答は、解答欄 (い) に記述せよ。

- (7) $-1 \leq x \leq 5$, $-4 \leq y \leq -2$ のとき、 $2x - 3y$ の式の値の範囲を次のように求めた。

$-1 \leq x \leq 5$ の辺々に2をかけて、 $-2 \leq 2x \leq 10$ …(ア)
また、 $-4 \leq y \leq -2$ の辺々に3をかけて、 $-12 \leq 3y \leq -6$ …(イ)
(ア), (イ)の辺々を引いて、求める値の範囲は $10 \leq 2x - 3y \leq 16$ 答

この解答は誤りである。このことについて以下の問いに答えよ。

- ① $2 \leq 2x - 3y \leq 16$ が成り立たない x, y の組を1つ挙げよ。
② 正しい解答をかけ。

4 校内研究公開授業より

12月20日（水）、美術の宇田川先生が研究公開授業をしました。

題材名は「今日だけ学芸員」。6時間の単元計画の5時間めでした。グループで仮想展覧会を開くという設定で、そのコンセプトをまとめる中で議論したり意見を出し合ったりすることを通して、他者の見方・感じ方を受けながら自分の見方・考え方を分析に表現できているかということを本時の目標に、「美術への関心・意欲・態度」を評価の観点におく授業でした。

各グループが選んだ展覧会用の絵や写真などを見ながらそのコンセプトを考えていく流れでしたが、最初は議論が活発化しなかったため、宇田川先生も「こうしたらいいかも」などと指導・助言をされていました。しかし、途中から「なんでそれを選んだのか?」「なぜそう感じたのか?」など、なぜをグループに投げかけるように変えられたことで、授業の後半は目標に近い活動になっていきました。

国研の樺山調査官が、以前教育センターで研修講師を務められた際に次のように話されています。「思考力は、ゆさぶられないと働かない力。判断力は、理由や根拠を明確に示す力。表現力は、頭の中で考えていることを整理して話したり書いたりまとめたりする力。」……この言葉を思い出しました。